

連載 プロマネの現場から

第85回 立花宗茂・奇跡の振り返り

蒼海憲治(大手SI企業・金融系プロジェクトマネージャ)

2月末に博多に出張する機会があり、翌日が休日だったため、博多より1時間弱のところにある柳川に足を運びました。柳川は、柳川城のまわりにぐると張り巡らされた掘割とそこに浮かぶ「どんこ舟」により、水郷として有名です。現地に行くまでは、2月の川下りは寒いので、乗るかどうか迷っていたのですが、船底が平らな「どんこ舟」の上には、コタツが並んでおり、なんとも優雅なコタツ舟となっていました。船頭さんの調子の良い歌声と語りを聴きながら川下りを満喫することができました。

川下りツアーの終点には、この地で生まれた歌人、北原白秋の記念館と「御花」があります。「御花」は、旧柳川藩の藩主であった立花家の別邸でした。明治時代に建てられた本館には、百畳の大広間があり、その外には、名庭園である「松濤園」が広がっています。この「御花」の入口にある立花家史料館には、立花家由来の品々が展示されています。今回の柳川を訪れた目的は、この柳川の城主であった立花宗茂に、以前から興味を持っていたからでした。なぜ興味を持っていたのか？

いまから415年前の関ヶ原の合戦は、東西両軍合わせて15万人以上が激突した天下分け目の合戦でした。その戦後処理において、敗れた西軍に加担した大名・武将は93家、約170名を数えたといわれています。その多くは改易・減封されましたが、その中で、後に大名に復帰できたものが若干名いました。ただし、その多くは、大阪冬の陣での活躍により、子の代になって父親の代の旧領を新封・再封されたものが多く、一代で、かつ旧領に復帰できたのは、立花宗茂ただ一人でした。

その復活の秘訣はどこにあったのか。またその宗茂が暮した土地を見てみたい、と思ったからでした。

立花宗茂の誕生年月及び生誕地とも諸説ありますが、永禄10年(1567)8月18日生まれ、豊後国国東(くにさき)郡笥(都甲荘笥城。大分県国東郡安岐町(あきまち))が有力といわれています。実は、宗茂と名乗った時代は、晩年の一時期のみと短く、当時の風習に倣って、統虎、鎮虎(しずとら)、宗虎、正成、親成、尚政(なのおまさ)、俊正、経正、信正、立斎などと次々に諱(いみな)を変え、その数は十にも及んでいます。以降は、愛着を込めて、宗茂で通したいと思います。

宗茂は、大友宗麟の重臣である高橋紹運(たかはし じょううん)の長男として生まれます。

幼少の頃のエピソードとしては、8歳の時、見世物の最中に、群集の中で争いが起きて死傷者がでて周りが騒然とする中でも平静でいました。供の者がこの場は危険であるため早々に立ち去ろうと進言したのに対して、お前たちが慌てるとはおかしいことだ。我々は、あの争いの相手ではないのだから、どうしてこちらに切りかかって来るようなことがあろうか。見せ物がまだ終わらないのに、どうして立ち去る必要があるのか、と笑顔で答えたといわれています。実際に、騒ぎはすぐに静まり、見世物が再開しました。

隣国の秋月氏との戦いで初陣ながら武功をあげる活躍をみせます。秋月種実との嘉麻・穂波の戦いで、嘉穂八木山の石坂で秋月勢を迎え討ち、本隊とは別に、自らが150の兵を率いて戦い、敵将の首をとる戦功を挙げます。冷静沈着に指揮するだけでなく、敵将を捕えた後は、その首を部下に討ち取らせ武功を譲る配慮を、初陣において見せたともいわれています。

この宗茂の働きを知り、紹運とともに大友家の重臣であり、息子のいなかった立花道雪（どうせつ）（戸次鑑連（べっき あきつら））が、宗茂を養子にほしがります。道雪の求めに対して、紹運は当然ながら首を縦に振らなかったのですが、再三の求めにより最終的には受け入れたのでした。

高橋紹運と立花道雪ともに、江戸時代に書かれた『名将言行録』の中に登場する名将・猛将であり、この二人の父・義父の生き方に、宗茂が大きな影響を受けたのは間違いありません。

道雪の養子となった宗茂は、道雪の娘、閨千代（ぎんちよ）と結婚し、娘婿となって立花氏の跡を継ぎます。閨千代そのものが、若くして道雪から家督を受け継ぎ、立花城の女城主であったため、普通の夫婦生活とはだいぶ違った様子のように、宗茂を取り上げた多くの小説ではこのあたりのことが描かれており、それはそれでとても興味深いのですが、今回は割愛します。

道雪が亡くなった後、宗茂は、筑前（福岡県）立花城主となり、父・紹運とともに、大友氏の筑前を守ります。

しかし、1586年、豊臣秀吉の全国制覇を前に、九州制覇を目指して北上する島津氏の大軍を迎え、紹運は岩屋城に立て籠もって抵抗します。島津氏側が5万を超える大軍であったのに対して、城側はわずか763名でしたが、降伏勧告を拒否し、全員討死し、岩屋城も陥落します。また、弟・直次が守っていた宝満城は、戦わずして城を明け渡します。

その後、宗茂が守る立花城も、島津氏の大軍に包囲されたのですが、宗茂は徹底抗戦し、豊臣秀吉の九州攻めまでねばり抜きます。この時の秀吉軍の先陣となった毛利軍も黒田軍も、弱冠二十歳で健気にも立花城を守り続けている宗茂の姿勢に胸を打たれ、「戦国武士の鑑である。死なせてはならぬ」を合言葉に、いっせいに速度をあげて救援に向かいます。

この秀吉軍の九州上陸の一報が届き、島津氏が本国で守りを固めるため薩摩に向け撤退を開始すると、逆に、宗茂は城から打って出て、友軍を待たずに島津軍を追撃して数百の首級をあげ、

高鳥居城を攻略し、失った岩屋城・宝満城を奪還します。

その結果、豊臣秀吉は、ある諸大名列座の席で、「立花宗茂、その忠義は鎮西一、その武勇また鎮西一」と評します。宗茂は、その功績から筑後三郡、十三万石をあたえられ、大友氏から独立した大名に取り立てられ、柳川城主となりました。

秀吉がこう評価した理由は、立花城を数十倍の敵から守りぬいた武勇だけではなく、その忠義にもあったと、江宮隆之さんは、『立花宗茂 「義」という生き方』(*1)の中で述べています。

下剋上の戦国の世の中で、

「おそらく最も武人としての節を通して生き抜いたのが、立花宗茂であつたらう。

宗茂は「武将」として卓抜した采配を振るい、その実力を遺憾なく発揮し、

さらには表裏のない人柄と生き方によって、味方ばかりか敵方の武将までも魅了した。」(*

1)

その宗茂の節を通す生き方は、義父と父より受け継いだものであつた。

「斜陽であつても大友家を最後まで守る。

これが道雪と紹運の決意であつた。これは、主君の「恩」に「奉公」という形で報いる、

という九州の武将に残っていた鎌倉時代的な士風がその根底にあつたからである。」(*1)

そして、このことは、

「最も苦難の中にあつた主家・大友家を見限ることなく、大義に生きようとした宗茂を、太閤秀吉は最大に評価した。

秀吉が知つた「宗茂像」は「律義で誠実、勇気があつて知謀にも優れている」というものであつた。」(*1)

「ほかの者がどれほど大友家を裏切ろうと、自分たちだけは最後まで大友家に尽くす」

今からみると、その支えるべき、大友家が根元から腐っているようにみえます。それでも筋を通した紹運、道雪、宗茂の潔さは、尊敬に値するし、当時、秀吉も最大限に評価したのだと思います。

また、この秀吉の処遇を大恩に感じた宗茂は、関ヶ原の合戦の際、ただちに西軍の呼びかけに応じました。東西いずれに味方するか必ずしも家中も一枚岩ではなく、お家安泰を求める、妻の闇千代に対して、

「・・・わしが秀頼様のお招きに応ずるのは、利得のためではない。
太閤様の御恩義に報いたてまつるのは、為さではならぬ武士の義理であると思うからのことだ。
すでに義によって立っているのだ。
不幸、大坂方が敗れたため家が亡びようとかまわぬと、腹をすえているのだ」(*3)

ところで、この宗茂の人柄は、どのようなものだったのでしょうか。

江戸時代に岡谷繁実によって書かれた『名将言行録 現代語訳』(*2)によると、

「宗茂の人柄は、温純で寛厚で、人徳があって驕ることがない。功があっても自慢することがない。

人を使うのも、おのれの意にしたがってしかも自然である。

善にしたがうこと、あたかも自然の流れのようである。

佞人(ねいじん)(口先上手なゴマすり人間)を避けて遠ざけ、

奢侈を禁じ、民に対しては撫するように恩を与え、士を励ますには義をもってした。

そのために士はみな、宗茂の役にたつことをしようと楽しみにした。

その用兵ぶりは、奇襲と正しい正面攻撃と正しい、いずれも天性の妙を発揮した。ゆえに、攻めればかならず取り、戦えばかならず勝利を得たのである。」(*2)

このことが美辞麗句ではない証左として、関ヶ原の合戦で改易後の民衆と家臣の宗茂に対する態度にあります。

海音寺潮五郎さんの小説「立花宗茂」(*3)の中では、こう描かれています。

関ヶ原の合戦後、柳川城を明け渡し、城を去ろうとする宗茂の元に、

「門外の道一ぱいに、多数の百姓等が土下座している。

小袴をはき、小脇差をさした庄屋風の者数十人を先頭にして二、三百人もあろうか、

薄赤い斜めな日のさしている冬枯れた景色の中に、異様な情景であった。」(*3)

この庄屋等の中の一人が、百姓は一人残らず宗茂へお味方するので、お城に籠って徹底抗戦すべき、と主張します。

宗茂は感謝しつつも、解散を求めます。

「それで、皆、泣く泣く道をひらいたが、帰ろうとはしない。

宗茂一行のあとから、ぞろぞろと、どこまでもついて来るのであった。」（*3）

加藤清正のもとに身を寄せる宗茂夫妻を慕って、肥後まで来た者が百数十人いました。

さらに、1年数か月ぶり後、肥後から京へ立つ際も、宗茂の家臣の由布雪下（ゆぶせつか）、十時摂津（とときせつつ）以下、19人はどこまでも宗茂について行きたいと言った。家臣たちは、たとえ乞食をしてでも、「主人を養おう」としていたようです。

「こんな境遇にあつて、なお宗茂を守護して、背き去る者が一人もいないというのは、単に封建的忠誠とか、義理の観念とかでは、解釈がつかない。

そこにあるのは、義務の強制のない、親子の愛情、恋愛、友情等に類するものであったに相違ない。」（*3）

と、海音寺さんも評しています。

また、武勇においては、どの戦場においても数々の武功を立てながら、自分から決してひけらかすことはありません。

「数年いろいろと試してみるが、人間というものは、戦場での働きについては、後になるとたいそう飾り立てて申したがるものだ。

それは、われながら少し働きが足りなかつたと思えばこそ、なお大袈裟にいいたがるのであろう。

まだ働きが足りぬと思うのであれば、それはまことの侍の道を知っている者だ。

少しの働きを大きく自慢することの多いのは仕方のないことだ。」（*2）

また、

「小瀬甫庵が『太閤記』を編輯（へんしゅう）するとき、宗茂に「貴殿の記録を」と求めた。宗茂は笑って「拙者のしたことは天下の公論に基づいたもの。

どうして名をあげるために、その功績を記録するようなことがあろうか」といって、何も与えなかつた。」（*2）

といます。

そして、関ヶ原の合戦になります。

大軍を引き連れて大坂へ向かう途中、徳川家康より書状が届きます。そこには、もし自分の味

方をしてくれたら、筑前・筑後のうち五十万石を与えよう、というもの。現在の知行の四倍もの申し出を受けながら、それになびくことはありませんでした。

そして、西軍に味方し、宗茂は大津城を攻め落としたものの、決戦の地である関ヶ原に間に合わず、戦わないまま敗戦、改易されてしまいます。

しかし、4年の浪人生活を経た1604年、宗茂は本多忠勝の推挙で、徳川秀忠の相伴衆の一人となり、その後、陸奥棚倉に1万石を与えられ、大名に復帰します。

その際の心境はこうでした。

「・・・まず与えられたこの棚倉の地に永住するつもりで根を生やし、民とともにゆたかな国に仕立て上げることが大切だ。

・・・当面は年貢を前領主の率に比べて1割引き下げたい。

そのためには、われわれ武士も鋤を取って、未開の地を耕すことが必要だ。」(*4)

「おれは左遷された」と思う上司は、部下全体を馬鹿にし、働く人のやる気をそぐものですが、宗茂は、九州育ちで東北のことはまったく土地勘がないにもかかわらず、「ここに骨を埋めるといい切り、「民とともに生きる」と宣言しました。

そして、さらにその後、大坂の冬夏の陣で、徳川方として活躍し、改易後、20年を経た1620年、ついに柳川城と旧領・筑後三郡が与えられるという奇跡の振り返りにつながります。

抜擢した徳川秀忠は、こう述べています。

「以前に僻遠の小邑に封じて置いたが（関ヶ原の合戦ののち三年間、宗茂は陸奥棚倉に移されていた）、それに対して怨みもせず、いかりもせず、ただただ義命に安んじていたことは、まことに満足に思っている。それゆえ、このたび柳川の旧封を授けるから、ますます武備を修めよ」(*2)

それに対して、宗茂は、落涙してその恩を深く感じています。ただし、宗茂自身、敵になりながら復活できたことをこう振り返り、家中のものたちに訓戒した、といます。

「しかし考えてみると、一つに当家の武勇が道雪以来、世に恥じることはない。

これらのことなどをご賞玩（しょうがん）あったせいでもあろうか。

そうだとすると、今後はいっそう上下ともに武備を忘れてはならぬ」(*2)

この宗茂の義、道義の筋の通った生き方に、現代でも私を含めて、さわやかさを感じる人が多く、今日の宗茂人気が続いているのだと思います。特に、困難なプロジェクトに携わることの多いIT技術者にとって、たとえ厳しい局面であっても逃げずに、対峙する姿に共感する人は多いのではないか、と思います。

<参考図書>

(*1) 『立花宗茂 「義」という生き方』 (新人物文庫)、江宮 隆之、KADOKAWA/中経出版、2014年刊

(*2) 『名将言行録 現代語訳』 (講談社学術文庫)、岡谷繁実、訳・北小路 健、中澤 恵子 2013年刊

(*3) 「立花宗茂」『剣と笛一歴史小説傑作集』所収(文春文庫)、海音寺潮五郎

(*4) 『小説 立花宗茂 〈下〉』(人物文庫)、童門冬二、学陽書房